【521】

氏　　名　石戸教嗣（いしど　のりつぐ）
学位(専攻分野)　博　士（教育学）
学位記番号　論教博第79号
学位授与の日付　平成11年3月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
学位論文題目　ルーマン教育システム論の再構成

論文調査委員　（主査）教授 竹内　洋　教授 上杉孝實　助教授 稲垣恭子

論文内容の要旨

本論文は，序章，第Ⅰ部，第Ⅱ部から構成されている。第1章は，ニクラス・ルーマン（Luhmann, N.）の教育システム論としては最初のもっとも体系的な『教育システムの反省問題』(Schorr, K. E. との共著）を手がかりにしながら，システムの自己準拠性をシステムの反省能力ととらえる前期ルーマンからシステムが自己と環境を観察している「オートポイエシス」システム論への変化としてみる。こうしたルーマンのシステム論の変化と理論的発展を詳述し，ルーマンの教育システム論の変化発展を4期にわけて論述している。そして再生産論，正当化論，解釈的アプローチなどこれまでの教育社会学理論が観察者や観察の視点をシステムの外部においていることで不十分であるとしている。第2章と第3章では，教育システムが他のシステムとおなじようにオートポイエシスのメカニズムをもって活動していることをルーマンの「コード化とプログラム化」論文などに則しながら選抜コードという視点から展開し，あわせて「教育システムにおけるタクトと点数」などの論文によりながら時間的な観点から教育システムのオートポイエシスを考察している。システムにとって時間が重要なのは，歴史や時間そのものに意味があるからではなく，システムが「現在」を操作するために過去と未来が意味をもつからである。とくに教育システムがオートポイエシスをおこなうには，時間的見通しがもつことが必要であり，教育システムにおけるそうした時間的見通しの鍵になる概念が，教育意図，カリキュラム，教授法などのプログラム，選抜だとしている。第4章は，以上3つの章にわたるルーマンの教育システム論の特徴を改革教育学の中で位置づけることを試みている。「改革教育学」などの論文に依拠しながら，改革志向は教育システムのオートポイエシスにとって教育システムの内部と外部をつなぐ役割をはたしており，不可欠な契機であること，教育システムの技術的欠陥や構造的欠陥として特殊として語られている言明は間違いである，とされる。そういう欠陥は教育システムのみならず，機能システム一般の特徴であり，それは合理化過程が非合理的な宗教要因（ウェーバー）や連帯の精神（デュルケーム）によって維持されているように，近代社会が合理的説明がつかないものに立脚していることに由来している。そうした技術的欠陥や構造的欠陥をのりこえようとする試みがシステム内部からたえず産出されてくる。欠陥の処理の仕方が機能システムによってちがうだけである，とする。以上が第Ⅰ部であり，第Ⅱ部は教育システム内部におけるオートポイエシスを授業システムや教師と生徒のコミュニケーション問題としてとらえ，「メディアとしての子ども」などのルーマンの論稿を参照しながらルーマンの議論を再構成している。第5章では，後期ルーマンにおけるオートポイエシスの要素としてのコミュニケーション論をとりあげ，教育システムにおけるコミュニケーションの独自なメディアとシンボルについて論じられている。第6章では，第5章とおなじく後期ルーマンの議論とくにオートポイエシス概念を中心にすえ，授業システムをコミュニケーション・プロセスとしてとらえている。授業システムが複雑にみえ，全体的なとらえかたができにくいのは，それぞれの参加者が自己準拠しながらコミュニケーションしあうことによる，とする。そこで，教師と生徒が観察しあう関係であるとしてとらえることの重要性が指摘され，観察意図，観察内容，行為の相関性が論述されている。第7章は，教育場面における理解つまり教師が生徒を理解するとはなにか，生徒が教師を理解することはなにかについて考察している。第8章は，これまでは教育システムを社会システム，コミュ

ニケーション・システムとしてとらえてきたのに対し，それらとは別に子どもの心理システムが独自に存在するとして，教育システムのなかにおける子どもの心理システムに焦点があてられている。生徒の個性化やアィデンティティ形成が論じられ，とくに教育システムにおける教育と選抜の併存にともなう教育的コミュニケーションのパラドックスを明らかにし，生徒の過去と未来について透明で確実な見通しを与えることの重要性が指摘されている。以上で本論はおわり，結論としてこれまで展開し解明されてきたルーマンの教育システム論や教育的コミュニケーション論が日本の教育現実にとってどのような意味をもつかについて考察されている。とくに選抜体制下におかれている日本の生徒の問題をとりあげ，日本の教育問題は，単に選抜があるということだけではないとする。選抜問題を含めて日本の教育問題を考察するには，教育システムと他の機能システムが過剰に同一の原理によって編成されていること，その意味で複雑性の縮減という点で複雑化する社会への対応がなされていないところにある，とする。最後に日本という社会的文脈で発生している不登校やいじめなどの教育問題をもとに，ルーマンの教育システム論を再解釈し再構築していかなければならないという課題をそえている。

論文審査の結果の要旨

本論文は，ドイツの社会学者ニクラス・ルーマンの教育システムについての理論的考察をかれの社会システム論全体との関連で読解し，位置づけ，教育社会学理論として再構成し，さらに日本の教育システム解明の示唆をあたえる意欲作である。本著者ほ1980年代後半にルーマンの著作にであい，以後，「N.ルーマンの教育システム論」（『埼玉大学紀要教育学部（『教育科学Ⅰ』第40巻第1号，1991年）などいくつかの論文をまとめてきた。本論文はこれらの論文や学会発表をもとにし，手直しされ，さらにあらたな論稿が大幅に追加されて構成されている。

本論文が対象にしているニクラス・ルーマンの社会システム論は，すでにヨーロッパでは大きな影響をあたえているが，近年はアメリカや日本においても多くの研究論文，研究書がでるようになった。ルーマンの理論の魅力は厳密かつ精緻な思考によって，個人としてのシステムと社会システムを他方を前提とすることなく連続的にとらえることに成功していることにある。ただ，それだけに，われわれの日常思考や日常思考と密通する自成社会学（フォーク・ソシオロジー）とは遠く，日常的な認識をいったん切断し，かっこにくくらないと理解しがたい難解さをもっている。用語や言い回しも独特である。本論文は，そうした難解さをもつルーマンの社会システム論をとくに教育システムに照準して読解し，日本の教育システム解明の示唆を得ようとする点で評価される。さきに述べたように，近年は日本においてもルーマンの社会システム理論の紹介論文はすくなくはないが，教育システム論に焦点をあわせ詳細かつ体系的に考察した論文は，本著者をしてはじめての試みである。ルーマンの論稿について初期から近年までをあたうかぎり渉猟し，根気よく読解している。しかも単に表面を祖術しているだけでなく，本論文の題名にあるように教育システム論に照準し，ルーマンの社会システム論にたえず立ち返り，再構成し，論述していることが評価されるだろう。また，つぎの点でも評価される。教育社会学理論にあらたな地平を開いたことである。それはつぎのような事である。第二次世界大戦後の教育社会学理論は構造機能理論が支配し，やがてそののりこえとして，再生産論，エスノメソドロジー，正当化理論，構造主義がでてきたが，そうした新しい教育社会学理論は観察がシステムに回収され，あらたな循環をうむという観察問題やシステムの反省問題を無視しているという診断によって，ポスト構造機能理論の認識論的弱点を抉摘したことにある。また教育システムの構造的パラドックスを解明し，教育作用の機能的コントロールによって回避する示唆をあたえた点も評価される。

しかし本論文にいくつかの問題点もある。まず本論文が難解なルーマン理論にあたうかぎりよりそい内在的理解を目指しているせいもあるが，ルーマンの理論の難解性と複雑性が充分縮減されたとはいいがたい面がある。それに関連して，どこまでがルーマンの言明であり，どこからが本著者の言明や解釈であるかが不分明な箇所がままみられる。またこれまでの教育社会学理論の認識論的欠陥を指摘していることは評価されるにしても，ピエール・ブルデューを機能主義理論，マイヤーの正当化理論を解釈的アプローチとして整理し批判していく手つきはやや荒っぽい。また本論文は広義の学説研究にはいるが，そのように考えれば，もうすこしルーマン理論の背景を論述すべきという意見もあった。ルーマンの社会システム論はパーソンズの構造機能主義をもとにしており，オートポイエシス概念は生物学理論における生命システム論に由来している。また一般システム論は社会学だけではなく，サイバネティクスをはじめとして長い歴史をもっているからである。さらにルーマンの反省問題や観察は英国の社会学者アンソニー・ギィデンズのいう「再帰性としての近代」と，またルーマンのメディ

ア概念はギィデンズの象徴トークン概念とも親縁性をもっている。教育社会学理論だけでなく，ルーマンの理論を近年の社会学理論の中で検討する必要があるのではなかろうか。

このようにいくつかの問題点は残されてはいるが，すでに述べたように膨大な文献を渉猟し，独自の観点からルーマンの教育システム論を再構成した著者の長年にわたる篤実な研究は高く評価されるし，教育社会学理論への貢献も大きいと確信する。

よって，本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成10年10月14日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果合格と認めた。